



1月号

ひだまり

今月のエッセー

除夜の鐘

新年明けましておめでとようございませす。本年も皆さんにとってよい年になることをお祈りします。

さて、年末年始、皆さんはどのように過ごされましたか？

私はというと、例年のように実家がある長野県に帰省いたしました。大晦日在家でのんびりと過ごしたいところですが、私には一大イベントである「除夜の鐘」の手伝いが待っていました。

毎年、百人ほどの地元の人々が、私の師匠のお寺の鐘つきに訪れます。甘酒とみかんが振舞われ、本堂でお参りをすませた後、最後に除夜の鐘をつくのです。

編集後記



あけましておめでとようございます。新春を迎えてもう半月。早いですね。さて、お正月にもらって嬉しいのが年賀状とお年玉。けれども今、年賀状はあまり流行らないらしく、年賀の挨拶はメールで済ます人も多いのだとか。私は人が手で作った形ある物をもらせるのが嬉しいので、画面の中のメールより、はがきの年賀状の方が断然好きです。もらうより出す方が多いですが。

さて、年賀状はまだしも、問題はお年玉です。誰もくれません。むしろそろそろあげてもいいお年頃。

時が経つので、本当に早い…。

◆ 田代浩潤 たしろこうじゅん

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

私の役割は、鐘を打つタイミングを参拝者に伝えることです。鐘の余韻が消えるか消えないかという瞬間に「今です、ついで！」叫び続けます。凍えるように寒い中、ずっと立ち続けているので、私の除夜の鐘には、毎年ホッカイロの温もりが欠かせません。

ところで、この除夜の鐘は、どのような理由ではじまったのでしょうか。一説では、百人というのは人の煩惱の数で、それを消除するために鐘をつくといわれています。年の変わり目に鐘をつくことで、その年一年の煩惱を払い、次の年が良いものであるようにお祈りするのです。

煩惱を払う…。何だか全部ちゃんと払えたのか心配になってしまいます。もしかしたら、大切なものは払えたかどうかではなく、煩惱から起こる自分の行いを振り返ること、そのものなのかもしれない。一年間の行いを反省する大切な機会。それが除夜の鐘なのでしょう。

祥泉院さんでも、毎年、除夜の鐘が行われるそうですね。昨年の煩惱を払った皆さんは、新たな年を迎え、どんな抱負を抱いているのでしょうか？ ◆ 竹村信彦 たけむらしんげん

法のお話



二年度
田中仁秀
たなかじんしゅう

『道を求める』

皆さんは、何か長年やり続けていることはありますか？

仏教では、お釈迦様が説かれた教えにそって、その道を探め、生き続けていくことを「求道（ぐどう）」といいます。

人生を通して、教えを実践していくこと。それが大切な姿勢であるとされているのです。それは、「仏道」という言葉にも集約されています。

私は、この「求道」する姿勢は何も仏教に限ったことではない、私たちに普遍的で大切なことを伝えているのではないかと感じています。

例えば、私は音楽が好きで、機会があればライブに行きます。

何故、ライブに行くのか？と問われれば、やはり家で音楽を聴いているだけでは体験できない、まさに生（ライブ）で演奏しているアーティストの姿を見るのが好きだからです。その姿を見ると、何年、何十年と積み上げてきた苦労、喜び、悲しみ、などのさまざまな感情がその存在を通して浮かび上がってきて、それが私の身体に飛び込んで、染み渡ってくる感覚があります。

そんな体験を通していつも感じることは、「この人たちは自分の求めてきた道をずっと歩んできたのだな。」ということですね。言うなれば「音楽道」です。その結果として、「今」があり、周りの人たちに対して感動を与え、共感を得る力が備わっていったのではないかと、思うのです。

私は、その力強さには「よし！自分はこれをやっていくぞ！」という初心が根底にあって、自分の支え、根っこになっているのではないかと感じます。「本当にこれは自分がしたいことなのか？」「この先やり続けていって大丈夫なのか？」、さまざまな想いや迷いが時に

は襲ってきたことでしょうか。

そうだった時、自分は何故この道に進もうと思ったのか、自分の支えとなっている想いを思い出し、迷える心と向き合うことにより、「音楽道」を貫いていったのではないかと、私はある時に出会ったアーティストの姿を通して感じたことがあります。

仏教においても、お釈迦様は「なぜ人は、老い、病にかかり、死ぬのか」という修行の道に進む動機となった最初の悩みに、人生をかけて真正面から向き合いました。

その道中では、さまざまな想いや、迷いが時には襲ってきたことでしょうか。その都度、どうしたら悩みを解決出来るのか、自分自身を見つめながら、一步一步少しずつ前に進んでいったのではないのでしょうか。

そんな修行の末に身についたお釈迦様の姿勢や生き方、また人格を通して、感動や共感を覚えたからこそ多くの人たちが集まり、仏道を歩んでいったのでしょうか。そして、お釈迦様が説かれた教えを拠り所として人生の指針、支えとしていったのではないかと、私は思います。

正にお釈迦様が人生を通して求め、示された教えが仏教徒の「道」となったのです。

私の大切なもの

『ミニ箒』 ぼうき



普通のミニ箒です。最近まで意識したことはなかったですが、振り返ってみると、小学校に上がって以来二十数年間使っている付き合いの長いものでした。

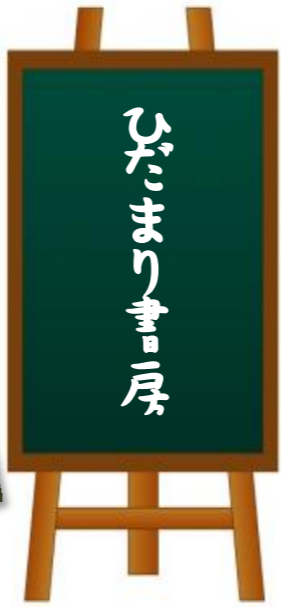
小学生になって、買ってもらった机を掃除するのに、恐らく母親がスーパーかどこかで買って来たのだと思います。当初の目的通り、机の上に散らかった消しゴムの屑などを集めるのに使いましたが、工作が好きだったので、牛乳パックや段ボールを切った時に出る切れ端を集めるのにもしょっちゅう使っていました。作業した後、道具を使って自分できっちり片付けをするのが、どこか大人らしく感じられて誇りしかった記憶があります。

そんな頃から、当たり前前かつ日常的に使ってきたものなので、大切と意識したことはありません。しかし、引き出しの中で見かけて、改めて振り返ってみると、宿題や工作をしていた時の情景が鮮やかに思い出されたのでした。

小学生以来、ずっと一緒に未だ現役の友です。◆田代浩潤
たしろこうじゆん



『いのちのきりぎりす』



『マルラゲットとオオカミ』

著：マリイ・コルモン

今回ご紹介するのは絵本です。主人公の女の子のマリー・オルガ（通称マルラゲット）は、森の中で傷ついたオオカミを付きっ切りで看病したことで、オオカミと心を通わせます。ある日のこと、オオカミが鳥を食べたことをマルラゲットに叱られ、その日からオオカミは動物を食べることを我慢しはじめます。

当然、肉食動物であるオオカミはどんどんやせ衰えていってしまいます。木こりのおじいさんから「このままだと、オオカミは死んでしまうよ」と言われたマルラゲットは酷くショックを受け、とうとうオオカミに生きものを捕って食べることを許します。それを聞いて後、オオカミは必要以上に動物を食べなくなりました。

私たちは生き物の命を頂かなければ生きていけない。そのことをこの本は改めて考えさせてくれます。◆國生徹雄
くにきてつゆ